

豊橋市立つつじが丘保育園

この保育園は、空間の領域が曖昧である。

季節によって異なる姿を見せる園舎で、自発的に発見や驚きを体験する。豊橋市のありのままの自然を受け入れ、風土とともに子どもたちを育む。さんぽをするように、楽しい発見で毎日があふれていく。



■建築の目指す姿

地域の風土とともに育つ保育園

0・1・2才児を対象とする保育園である。

乳幼児期の子どもたちが初めて社会に触れ、発達段階の異なる一人ひとりの子どもたちの興味や関心に寄り添いながら、自発的な活動を引き出す空間を目指した。室内外での遊びやふれあい、食事などを通じて、安心して過ごせる空間とした。

この保育園は、地域の自然や気候と調和しながら、子どもたちが五感を通じて風土を感じられる場とした。軒下には風が通り、陽だまりを感じ、季節の移ろいを肌で感じられる。幼い子どもたちにとって、この体験が地域の風土の記憶として刻まれていく。

木を中心とした構造は、素材そのものが持つ魅力を引き出すことに重きを置いた。素材の美しさを大切に、地域の風土と調和する空間を構築している。自然とともにある感覚やぬくもりを、幼い子どもたちに伝えていく「はじまりの場所」として地域とともに生き、未来へと続く建築を目指す。

■敷地

風土豊かな豊橋市とつづじが丘の地域に見守られる環境



豊橋市は愛知県の東南端、渥美半島の根元に位置する中核市で、東には南アルプス南端の弓張山地、北には本宮山などの山並みが広がり、西と南は海に包まれた豊橋平野の恵まれた風土に抱かれている。温暖で過ごしやすい気候にあり、最高気温が35度に達することも少ない。敷地は小学校、児童クラブ、公園、福祉センター、住宅地に囲まれ、まちの声があふれる温かくにぎやかな地域である。



■風土の中のさんぽミチ

子どもと水・土・草木の関係性から空間を考える

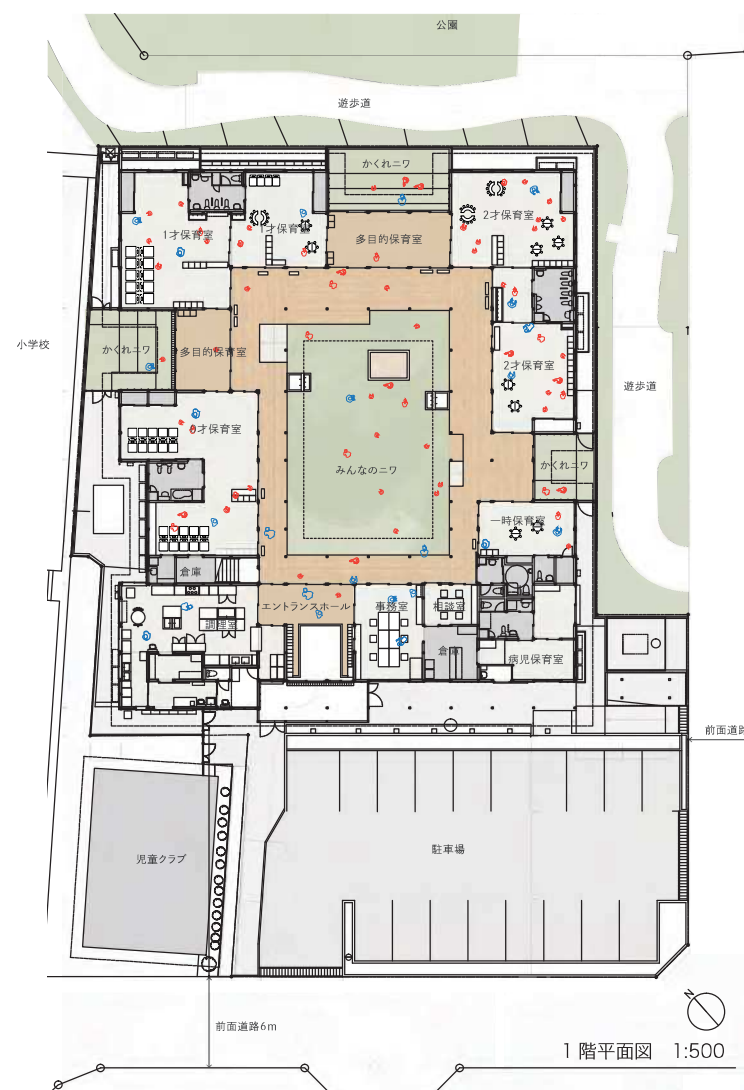
0・1・2 才児は地面に近い環境で育つ。土に触れたり、草を掴んだり、壁をつかまりながら歩き始めたりする。そんな子どもたちと外部との関係を大切にしたいこの計画では、庭に囲まれた保育室を設計した。内部でありながら、外部環境にいつでも触れられるような空間を作りたいという想いから実現した。



■配置・平面計画

「さんぽミチ」「みんなのニワ」「かくれニワ」

「みんなのニワ（中庭）」を中心として配置した「さんぽミチ（回廊）」は、子どもの発達段階などに応じてそれぞれ配置した保育室の『縁側』である。また外部への抜けとして分散配置した「かくれニワ（小庭）」は、各ゾーンのバッファとして子どもたち一人ひとりに寄り添う小空間となる。中間領域となる『縁側』の空間は、子どもたちの“動～静”と環境の“外～内”をシームレスにつなぎ、この園における多様な保育と子どもたちの自発的な活動を誘発する。「さんぽミチ」「みんなのニワ」「かくれニワ」は“地域の風土とともに育つ保育園”のしかけである。



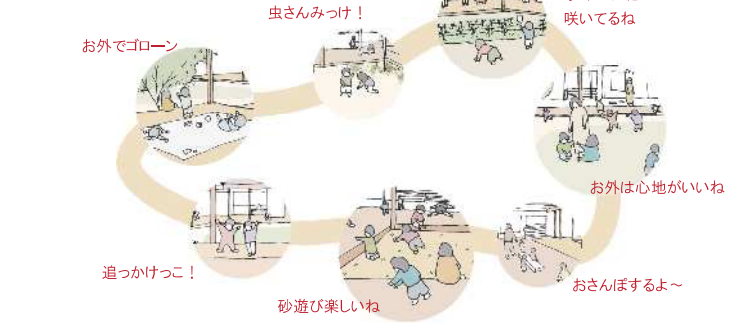
ダイアグラム



■コンセプト

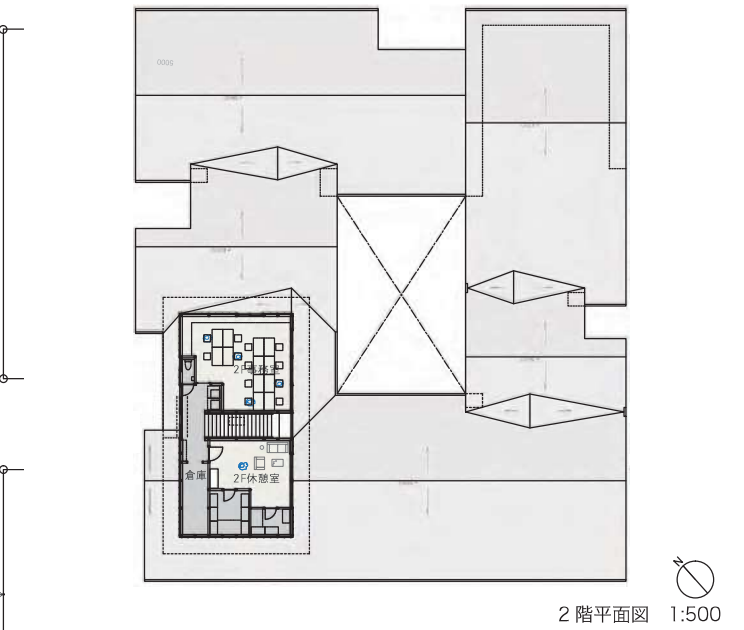
さんぽをするように風土を発見し、自ら学ぶことができる園舎

さんぽミチを起点に発達段階に合わせて子どもたちが思い思いに過ごすことができ成長につなげてほしい想いからこの案に至った。保育室で遊んでもニワで遊んでもいい。多感な時期である0・1・2才の子どもたちが自由に遊べる空間とした。



みんなのニワを中心とした口の字型の配棟計画は、外部に対するセキュリティを高めるとともに、園内のどこにいても子どもたちを見守ることができる安心な保育環境を実現した。また、保育諸室を公園・遊歩道のある側に寄せ敷地北側に配置した園舎は、近接する住宅地との適度な離隔を確保する。多目的保育室は隣接する保育室との一体的な保育空間としてイベントなど多彩な保育に対応する。外部建具を開放することでみんなのニワからかくれニワまでの内外保育空間が連続する。定員増に備えた将来の拡張スペースとしても想定する。

管理諸室を送迎のアプローチ側に集約しエントランスに隣接させた調理室は、食をきっかけとして子ども・保護者・保育士のコミュニケーションを促す。



保育室

明るく開放的で木のぬくもりのある健康的な保育室。
シンプルな空間を家具などで分節することで、遊びや読み聞かせ、
食事や午睡などの多様な保育活動にあわせてスペースを自由に設定できる。



みんなのニワ

保育園のどこに居ても視野に入る「みんなのニワ」での遊びは、子どもたちが豊橋の風土に直接触れることのできる空間である。隣接する「さんぽミチ」から直接アクセスでき、気軽に土に触れて育つことができる。

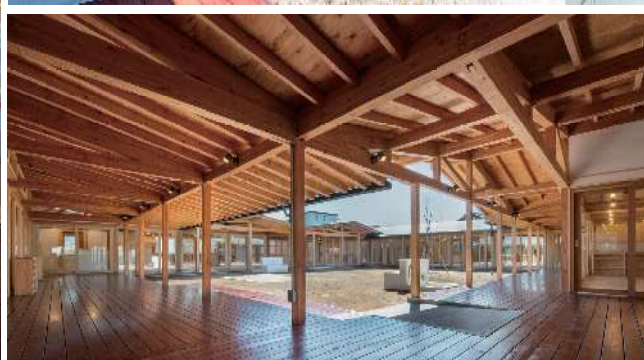
かくれニワ

園外との環境とつながる「かくれニワ」は、子どもたち一人ひとりに寄り添うクールダウンのスペースとしても利用する。



さんぽミチ

保育室の縁側となる「さんぽミチ」は、気候の穏やかな季節には建具を開放して、隣接する保育室と一体のスペースとなる。軒が深い半屋外空間は、天候に関わらず自然を感じることができる子どもたちの体験・発見の場である。



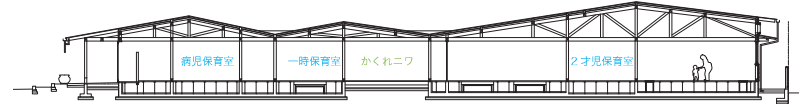
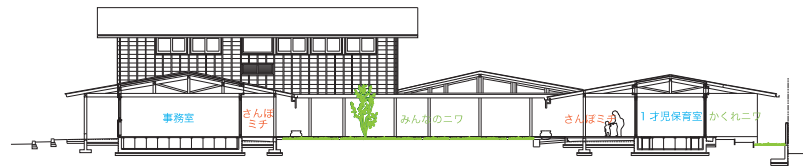
■立面・断面計画

気候の変化を享受し、開かれた木架構

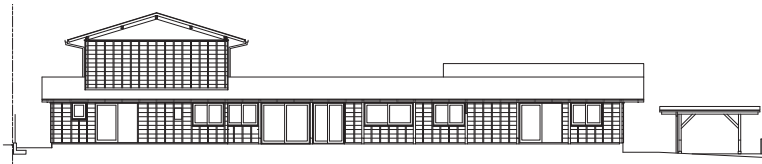
温暖な気候を室内に引き込むため、軒を伸ばし、開かれた構えをつかった。内部は連続した架構の下でひと繋ぎの空間となっているが、外部から見ると周辺の住宅地や山々の眺望と呼応するような切妻屋根の集合として見えるよう意図した。

保育室とさんぽミチをひと屋根で覆う最大梁行約17mの小屋組をトラスで構築し、梁せいを抑えるとともに柱のない安全な保育空間を確保した。連続する小屋組をあらわしとし真壁工法の軸組は、より軽快で開放的な木構造空間を実現し、子どもたちが本物の素材を感じられる空間となっている。

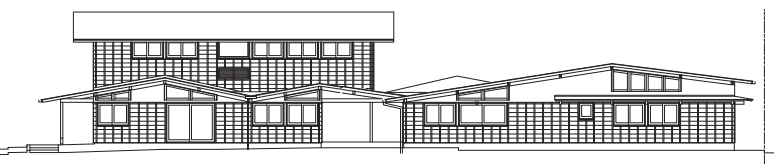
また、梁・桁下端をFL+2.1mに抑え、子どもたちにとって落ち着いた日常の生活環境を提供するとともに、周辺の住環境にも圧迫感のないヒューマンスケールな建築形状とした。



断面図 1:400



南立面図 1:400



東立面図 1:400



2才保育室。木架構が保育室とさんぽミチに渡って架かり、木屋根に囲われながら遊べる温かみのある空間となっている。



北東鳥瞰。遊歩道からかくれニワを介して保育室の様子や子どもたちの声が感じられる。

■内外装計画

地元に愛される東三河産材の活用

園舎は構造材を含むすべてに国産材を使用した。また、内外装の仕上げ造作、木製の家具・建具などの多くに東三河産材を採用している。下見板張りなどとした外壁には、軒や庇の出を大きく取り耐候性を考慮した。ここで過ごす子どもたち、保護者、保育士が地域の風土を感じられるような建築・空間づくりを心掛けた。



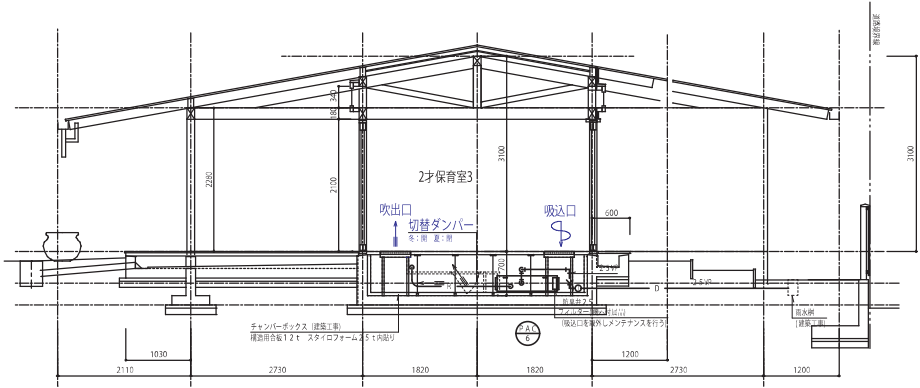
東三河産杉下見板張りの正面外観。



■設備計画

子どもたちにやさしい居住域空調

保育室には、床吹き出し空調を採用している。夏場はペリメーターゾーンに設けた吹き出し口から冷房が吹き出すようにし、冬場は、切り替えダンパーを開けて床下に暖気を流すことによって床全体を暖かくする計画としている。



様々な保育環境を多彩に演出する照明計画

小屋組みをあらわしとした勾配天井に配置したペンダントライトとスポットライトは、ゾーニングと調光制御により、保育の様々な場面に応じた室内環境の演出が可能となる。電球色のLEDランプは木質化の園舎を温かく包む。

■サイン計画

計画提案者である学生たちが保育室や各諸室のサイン、衝突防止シールをデザインした。クラス毎のサインは色彩、大きさ、フォントから木材の種類の選定、作成まで学生が自ら担当し、こだわりが詰まったサイン計画である。



■地域の風景・街並みとの調和

山並みや住宅地、園舎の切妻屋根が重なり合う。低層で低い軒のある園舎は、北側の公園や敷地周囲の遊歩道とシームレスにつながり、東三河産材による木質化の外観は、周辺の住環境に溶け込んだ温かみのある「まちの景」を創出した。



建築諸元

施設名称：つつじが丘保育園
建設場所：豊橋市佐藤五丁目 16 番地の 2
主要用途：認可保育所
通常保育 0,1,2 才児 定員 80 名 (最大 100 名)
一時預かり保育、病児保育併設
区域区分：市街化区域
用途地域：第一種中高層住居専用地域
防火・準防火地域：指定なし (建築基準法 第 22 条指定区域)
景観計画区域：まちの景 住宅系エリア
前面道路の幅員：6m (南側)、6m (東側)
建蔽率：60%
容積率：200%
構造・規模：木造 地上 2 階
最高高さ：7.47m
敷地面積：1832.70 m²
建築面積：895.32 m²
建蔽率：48.86%
延床面積：907.16 m² (うち、自転車置き場 11.66 m²)
容積率：48.87%

事業主体：愛知県豊橋市
建築計画提案・企画
とよはし公共建築学生チャレンジコンペティション
：中山朋紀・原 希望・永井里奈 (名古屋工業大学大学院 (当時))
(アドバイザー：手塚貴晴・手塚由比)
設計・監理：株式会社 藤川原設計
施工 / 建築：青山建設株式会社
電気：株式会社影山電機商会
管：三河設備工業株式会社

●事業経緯
建築計画提案・企画 2022.4 ~ 2022.10
(とよはし公共建築学生チャレンジコンペティション)
基本・実施設計 2022.11 ~ 2023.9
建設工事 2023.12 ~ 2025.2
開園 2025.4

